

政治家の言葉

●
第一生命経済研究所 常務取締役
村場 悦郎

この何年来耳にすることの多い話し言葉に「～させていただいております」がある。テレビでタレントがよく使っているが、丁寧な言い方と思って使っているようだ。「出演させていただいています」とか「お付き合いさせていただいています」とか言っているが、これは過剰なへりくだりに聞こえ慇懃無礼とさえ感じられる。これを書いている最中に離婚したタレントが「離婚を報告させていただきます」「結論を出させていただきます」という文書を出したと聞いて驚いた。「報告」はへりくだった言い方でいいだろうが、「結論」は自分たちで「出す」もので他人には関係なく、おかしい言い方だ。

「させていただく」は、岩波の広辞苑によれば「相手の指示を頂戴してするという卑下した形で自分の動作を謙遜した意を表す」、小学館の「言泉」では「相手に願って、自分が何かすることを許してもらう意の謙譲表現」とあり謙譲語である。したがって例えば電車の発車時間が来て「ここでドアを閉めさせていただきます」

という言い方はないだろう。

この「させていただく」という言葉を書者も舌をかみそうになって使うことがあるが、その時は主体性の無さ、自主性の無さが自分にあるように常々感じていた。この言葉は社会に蔓延しているようだが、これを多用する風潮は好ましいものではなく、あいまいな、弱々しい自信を喪失した現代日本を象徴しているように思われる。

この言葉を強い違和感をもって最初に聞いたのが、数年前某野党代表の「代表を務めさせていただいております」、「総理に質問させていただいております」であった。国を引っ張っていこうという政治信念から、政権交代での総理を目指し代表を戦い取ったのだから、自主的・野心的にその地位にあるわけであり、また国会質問もお願いして「質問させていただく」のではなく、国民から選ばれた議員として当然「質問する」のである。それが国民の負託を受けた政治家の責務ではないか、と思った。

そのようなことがあったものだから、昨年末に新党結成挫折後同氏が代表辞任に至った独断専行を「反省させていただいております」というのかと皮肉られていた。さようにこの政治家には「させていただく」イメージがついてまわったようだ。それは政治家に求められる強いリーダーシップとほど遠いひ弱さを示しているものであった。

さて、“政治家は言葉が命”と言われる。総理大臣や政治家の言動をみることによって国家のリーダーが何を考え、どのようにこの国を導いていこうとしているのか、国民やマスコミは見守っているのだが、最近の国会審議を典型としてその言動は誠に低調である。国会審議は質問側も政府側も原稿を読んで紋切り型に言い放つだけで、論戦によってそこから政策や方向が導き出されることはなく、言わば儀式化しているし、目をみはる政策提言もない。特に小泉総理はそれらの機会に信念、政策を分かりやすく説いて国民の理解を得ようとする姿勢が極めて乏しい。語調もひと頃に比べ弱々しく、最近は自分の言葉ではなく棒読みだからいよいよ心を打たない。冷静さを欠く発言や態度も目につき、国家の危機に最高責任者として冷静な判断ができるのだろうか、という懸念を感じることもさえる。

我が国では将来への不安が蔓延していることから消費をはじめなかなか元気が出ない。このような状況で総理は、痛みの先に展開されるビジョンを可能な限り示すべきである。強い語調で「改革なくして成長なし」とワンフレーズで繰り返されてもそれからは具体的な将来の姿は全く感じ取れない。また、総理の考える改革とそれが国民を守る方向に向かうものであるのか、を国民の前に言葉として引き出していくのが野党の大きな役割であろうが、とてもそれに応えているとは言い難い有り様である。

外務省改革もうやむやになっているし、課題はどんどん先送りされている。何かが変わるであろうという国民の期待への裏切りが度重なれば、よっぽど具体的に展望が示されないとどんなに大声で見得を切られようと信じることはできないのだ。

言葉というものをあまりにも安易にとらえる現代の世相、風潮と政治家の弱体化を感じざるを得ない。

今月号の鈴木論文「在宅介護支援センターの役割と課題」は、あまりよく知られていない支援センターの多彩な実態と問題点を整理したもので、介護問題を考える上で有益な分析を展開している。